水色の魔法

abc

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
水色の魔法

【Ｎコード】
Ｎ６７３２Ｃ

【作者名】
ａｂｃ

【あらすじ】
魔法を使える主人公が、いろいろな人を幸せにしていく童話です。読んだあなたにも魔法をかけます。あなたは、優しく、温かな気持ちになれる水色の魔法にかかります。

☆1　捨て犬と魔法

路地裏の捨て犬は耐えている。
見離された孤独と、降り続く雨に。
犬は、そばにある家の明かりを見つめていた。
僕は、口笛を鳴らした。
すると、その犬は、僕を見つけて、ワンと吠えたんだ。
かすれ声だった。今にも消え入りそうな、か弱い音だった。
でも、音は届いている。僕には、犬の鳴らした音が聞こえている。
雨。傘は、それを弾く。
音。弾かれて鳴った音。
犬。人に捨てられる。
音。捨てられた犬が鳴らした音。
点在する幾億の心が、それぞれの声を鳴らしている。
だが、相対する心が、その音を弾いていく。
人は、皆、何かを見離す。
犬を。人を。それらを見守ろうとする心を。

愛を。夢を。自分でも気付いている心を。

それらが、人から見放された時に鳴らす音が、僕には、聞こえる。

孤独の音や、絶望の音。軽薄な音や、後悔の音。

僕は、持っていた傘を振り、小さな魔法を唱えた。

間もなく、犬は元いた場所から、消えた。

そして今、犬は家の中。

明かりに包まれて、幸せそうに夢を見る。

見捨てないで。どんな人も、どんな犬も、どんな心も。

捨てられた人や犬や心は、僕らの世界で息している。音を鳴らしている。

明かりの中に、彼らを入れてあげて。

見捨てたい彼らはきっと、自分が好きな、あるいは嫌いな自分自身。

明かりは犬を照らす。明かりは、捨てた犬をまた抱く飼い主を照らす。明かりは、飼い主の犬を見守りたい気持ちを照らす。

鳴き声は消えた。音は、犬の幸せそうな寝息と、飼い主の涙のこぼれ落ちる音に変わる。

犬は、夢の中で、飼い主と楽しそうにキャッチボールをしている。

飼い主の手は、犬を優しくなで、それは飼い主の灰色の心を水色に変えていく。

優しく、愛にあふれた色である水色に。

僕は、それを覗き見て、そっと歩きだした。

次、待っている人のもとへ、僕の魔法が届くように。

☆2　裕平と魔法

今日は裕平の８回目の誕生日。

しかし、裕平は沈んだ気持ちでいた。なぜなら、祝ってくれる人は誰もいないからだ。

父親は、裕平が産まれてすぐに、裕平の前から消えた。母親は、裕平が６才の誕生日の時に自殺した。

裕平の預かり先の親戚は裕平のことを煙たがっている。「仕方なく預かっているのだ」と。

学校でも、友達はいない。裕平は、いつもひとりぼっち。クラスメイトから離れたところで、楽しそうに遊ぶクラスメイトを見つめていた。

今日の誕生日も雨が降っている。梅雨の時期に誕生日を迎える裕平は、毎年、誕生日を雨の中で過ごしていた。

誕生日の朝、学校へ行く道で、裕平は雨雲を見上げながらつぶやく。

「今日で、僕、８才なんだ」

裕平の側、電柱の陰で、僕は持っていた傘を一振りした。裕平が幸せになってくれることを祈りながら。この魔法が裕平を救ってくれることを祈りながら。

朝、裕平のクラスの雰囲気がいつもと違う。がやがやとざわめいている。裕平が聞き耳をたてると、なにやら転校生がこのクラスにやってくるらしい。

「どんなやつが入ってくるんだろう。でも、どうせ、僕には関係ないや」
裕平は心の中で、そう言葉を紡いだ。
「だって、仲良くなることなんてできないんだから」

担任の先生は、クラスメイトの噂どおり、転校生を連れて教室に入ってきた。

見ていると吸い込まれそうになる、くりっとした瞳を持った男の子だった。

「鳥海翔太といいます。今日から、よろしくお願いします」
翔太は先生に紹介されて、そう言った。

その1時間後、最初の休み時間に、驚くべきことが裕平に起こる。

なんと、翔太は裕平の机のもとへ駆け寄り、
「友達になろうよ！」
と弾むような声で言ったのだ。

最初は警戒していた裕平も、次第に翔太に対して心を開いていった。

時間を追うに連れ、日が経つに連れ、裕平と翔太は大の仲良しになっていった。

そして、翔太を通じて裕平の友達の輪は広がっていく。

裕平の幽閉されていた心は、日増しにそのトビラを開いていく。鳥が空を翔ぶように、心が自由になっていく。裕平の、海の中沈んていた心は、今や空を飛んでいる。

しかし、翔太との別れの日は唐突に訪れた。

裕平の９才の誕生日の朝、ホームルームの時間中に、担任の先生が言った。

「突然ですが、翔太くんは他の地域に引っ越すことになり、今日をもってこの学校とお別れすることになりました」

裕平の胸が動悸でバクバクいっている。

（そんな……！　そんな……！）

学校からの帰り道、裕平は翔太に、

「これで、さよならなんだね」

と目に涙を浮かべながら言葉を紡いだ。

「うん、さよならだよ」

「最後に、ひとつ聞いていい？」

「ん？」

「最初に会ったあの日、なんで僕に『友達になろう』って言ったの？」

「それは……。それは、君を遠くから見てくれている人がいるから

さ」

裕平は意味が分からなくて、きょとんとした顔をした。

「忘れないで。どんなに淋しくても、君はひとりじゃない。君には、どんなときでも味方がいるんだよ」

また意味が分からなかった。でも、なぜだか嬉しくて、裕平は泣いた。

「バイバイ」

「バイバイ」

最後のバイバイを言い交わして、裕平と翔太は別れた。その時、なぜだか、裕平は悲しくなかった。生き続けるかぎり、翔太にはまた会える気がした。少なくとも、翔太は裕平のこれからをどこかで見てくれているような気がしたのだ。

今日は、裕平の9回目の誕生日。

裕平の心は沈んではいなかった。今度の誕生日には祝ってくれる友達がいた。

翔太が祝ってくれた。他の友達も祝ってくれた。

次の日からも、裕平の心は明るかった。友達がいるから。もう、一人じゃないと思えるから。

梅雨も明けたある晴れた日に、柔らかい風が裕平の体を吹き抜ける。澄み渡った青空の下、裕平の気持ちは水色に研ぎ澄まされていく。優しく、温かく、そして自分に確信を抱かせる色である水色に。

風に吹かれた、元気なその顔を見て、僕は歩き始めた。
次、待っている人のもとへ、僕の魔法が届くように。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6732c/

水色の魔法

2010年11月12日21時09分発行